

漢法苞徳塾資料	No. 136
区分	治療論・各論
タイトル	「暑」の病について
著者	八木素萌
作成日	1991.07.21

◎夏の外感病は『熱病』と『暑病』である。

「夏至」以前を『温病』とし、「夏至」以後を『熱病』『暑病』とする。但し、諸論あつて用語が統一的に用いられているとは言えない。

用語の不統一の問題では「中暑」「傷暑」「中熱」「傷熱」が在る。「傷」「中」の概念を区分する論者が無い訳では無いが、区分不分明のまま論じているものが多いように見受けられる。

◎『夏』の気と『季夏』（＝長夏）の気

「生・長・化・収・蔵」は「春・夏・長夏・秋・冬」の気とされる。万物が繁茂する時期（長）であり、咲いた花は果実に転化し始める（化）時期であり、「夏至」は「陽気」が最強・最盛の時期である。「夏至」過ぎると「陰気」が始まる時期である。まさに「熱」と「暑」の季節である。「炎上」の季節と「竈湿熱」（むし暑さが竈っている）の季節である。

◎「旺・相・死・囚・休」の循環では、「夏」は「火・土・金・水・木」の位相であり、「季夏」（＝長夏）は「土・金・水・木・火」の位相である。「人氣」もまたこういう「位相」にあるのである。「死・囚・休」に位置している五臓に注目して置くべきである。（講義時に説明を要す）

◎『夏の外感病』としての『熱病』『暑病』が起こるのは、『伏気』（冬の寒さに冒されたが、すぐには発病にないまま、その寒さに傷られたという状況が、実は残って来ていた状態を言う）があったからで、これが「夏の外気」（「夏気」と言う）に触発されて、『熱』や『暑』の病気になるものであると認識されてきた。こういう『病機論』は、論者による相違は無い。

『伏気』の問題について「楊上善」は「冬傷于寒 軽者 夏至以前発為温病 重者 夏至以後発為暑病」と述べている。『温病正宗』に「唐以後 湿熱為暑」という指摘がある。

◎病証分類と主要症候

『暑病』『熱病』と言うも、論者により、概念規定には差異が見られるが、夏至以後の「暑さ」に

よって病んでいるものを指している点には相異は無い。

この時期の熱病には大別して「三種」がある。

〈イ〉ある者は「中暑」あるものは「陰暑」と呼んでいるもの。

〈ロ〉ある者は「中熱」他の者は「陽暑」と言うように言っているもの。

〈ハ〉「暑疫」「瘟疫」であるが、これは一群の「疫癘」の一環であるので、『暑・熱病』の分類に加えないで別に論じるものも少なく無い。

『医階辨証』（清・汪必昌）を見ると「夏令外傷七證」として「熱病」「傷暑」「中暑」「中熱」「湿温」「感冒風寒」「瘟疫」を挙げて、これについて「症候」上の弁別と脉象を記述していて、如何にも「辨証」の専門書である。

この書では、『熱病』は夏至以前のもの『暑病』は夏至以後の病として区分している。

「熱病ハ冬寒ニ傷ラレ久シク鬱セルモノ夏ニ至リテ発ルナリ、故ニ壯熱シ大イニ惡熱シテ内外皆熱ノ證ナリ、即ワチ晩発ノ傷寒ナリ」

「暑ハ陰邪外ヲ覆イ陽氣内ニ鬱シテ発越スルコト得ザルナリ、故ニ発熱シテ背ニ寒ヲ惡クムナリ、即ワチ夏ノ寒病ナリ」

「中暑ハ即ワチ傷暑ノ重キモノナリ、暑心肺ノ臟ニ中タルノ故ニ卒倒シテ人ヲ知ラズ中風ノ如キモノナリ、中暑ハ陰寒ノ外ヲ覆ウ夏病ノ陰症ナリ、中熱ハ陽熱ノ内外ニ乗ゼル夏病ノ陽證ナリ」

「夏令ハ天ノ暍氣ノ上ニ盛ンニ地ノ湿氣下ニ盛ンナリ、両間ノ熱氣ハ中ニ盛ンナリ。中熱ハ暍熱ノ二氣ニ病ヲ為シ、湿温ハ湿熱ノ二氣ニ病ヲ為スナリ、此レ中熱ト中湿ノ辨ナリ」と記述している。

夏の外感病に一貫する主要症状・基本的症状は、「火」「心」「熱」の症候である。

- ◆身熱（惡熱）
- ◆煩心
- ◆口渴
- ◆自汗
- ◆溺赤
- ◆脉虚（洪脉・鉤脉・大脉…など種々に表現されている）、等々となる。

このような基本症候が、「風」要素が強くなったり加わったりするもの、「寒」要素が強くなったり加わったりするもの、「湿」の影響が併せて表現されているもの、等々として変移する。

『温病正宗』の中に

「楊如侯曰：夏日熱病、因外感而発者、不外二端、一因外感風寒而発、一因外感暑暍而発。其因風寒而発者、脉必浮緊、蓋風脉浮、寒脉緊也。熱病之脉者洪大、若見浮緊、可知其夏日之傷于風寒。若輕拊之、脉見浮緊、略按之、脉仍洪盛、即可知其新感風寒之邪、外束于表、而内伏之熱、已発于裏矣。至因暑暍而発者、則病勢之来、尤速且激。蓋風寒之邪、從皮膚入、

由外入内、勢猶較緩：暑暍之邪、從口鼻入、直行中道、内外熱邪交扇、匪由肺逆伝心包、即歸并胃腑、此譚語遺溺等証、所由来也。医者对此二因宜明辨之。」とある。また

「雷少逸曰：潔古云：静而得之為中暑。東垣云：避暑乘涼得之者、名曰中暑…」とある。また、

「周禹戴曰：冬月有寒、則能傷人、名中寒：夏月有熱、亦能傷人、名中熱。此外来之熱、故曰中、非即伏寒發出、夏必病熱之熱也。」ともある。

以下に具体的に分類して検討する。

◎『陰暑』について

『中暑』と表現する者がある。

この「病機」は、「大廈・深堂などに暑を避けて、冷飲食したり体を冷やす作用がある瓜類等を過食して」いる為に、「外感風寒」に犯されやすくなっている所を「外感風寒」に『「傷」「感冒」「中」』られて起こる一群の症候となるという事である、このように「古医書」に記述されている。

わが国の現代の生活状況を考慮すれば、運動不足の条件の上に過剰なストレス下にあるが、至る所にクーラーが効いている、そしてアイスクリーム初め、冷飲食したり、メロンの類なども多食する傾向や、民族的には「暑い夏にはソーメンを」と言う食文化のもとで暮している。まさに「古医書」に指摘している『陰暑』『中暑』に容易になりやすい生活状況である。従って、我々が臨床上良く遭遇する夏の愁訴「夏まけ」「寝冷え」その他の諸症候も、『陰暑』の付随症候や、関連症候である事が多いのも肯ずけるものである。

『陰暑』『中暑』に基本的症候や病機的表現は「外は寒えており内は熱を帯びている＝外寒内熱」の状態にある事、

- (a) 「風」要素が多ければ、より「温病」的になり、
- (b) 「寒」要素が強ければそれが症候に反映しており、
- (c) 時には「夏の外感」であるから、「湿・湿熱」も加わっているものもある。

脈状は基本的には「浮・大・緊」であるが、「弦」「浮」（ともに風）が加わったり、「緊」がやや強くあらわれたり、「濇」が混入（寒）したり、「代」や「濡」の傾向が併行的に（湿・湿熱）出ていたりする〈湿の停滞性・沈濁性、湿熱の立ち籠め停滞する性質に関連するので、「浮」の状態が弱く「大」と言うよりも「濡」となる傾向〉。

病候的には、基本タイプは頭項痛・悪風寒・身体の強張り・関節や手足の筋の痛み・心煩・皮膚の熱感やホテリがあるのに発汗が少ないか・または皮膚熱感やホテリを訴えるのに表面を触ると冷たく微に自汗している・咳嗽をみる者もある。

- (a) タイプ…（外感の内「寒」が主要要素の場合）

頭項強痛・悪風寒・咽痒・身痛・咳嗽などの症状が、煩身・心煩・発熱・無汗等も出る。

治療は２段階…辛温解表して後に、裏（内）に籠っている内熱を除き（調涼裏）、更には体虚を補なう。

（b）タイプ…（外感の内「風」が主要素の場合）

頭眩し悪風し・鼻塞・症候は種々に変容し・筋は痠痺する、などの症候が加わる。「風」と「熱」とは互いに煽りあうこと、「火」が「風」を起こし、今度はその「風」が「炎」を煽るように、『陰暑』の一つであっても「風」要素が強い場合には、『陽暑』に転化して行く場合を警戒する必要がある。脈状には「弦」が加わる。

治療は２段階…辛涼解表調表して後に、裏（内）に籠っている内熱を除き（調涼裏）、更には体虚を（主に「陽」「気」を補い「津液」を調える。

（c）タイプ…（外感のうちの「湿」が主要素の場合）

嗜臥・四肢沈重・倦怠・溏便（ベタベタの軟便）・頭冒・両脛逆冷・胸腹痛などの症状も加わる。脈は「湿」の沈濁性・粘膩性の影響を受けて、「浮」は明瞭では無く、熱の割には「数」の度合いが低いし、「緊」もハッキリしない、「濡」れたベタベタする感じを帯びる。

治療は２段階…「湿」を除くように小便の出を良くして、中焦を調える。

（註）『暑湿』と『湿温』の診別問題は、微妙であるが重要であるので、『温病正宗』から引用して置く。

「楊如侯曰：身熱有汗、舌苔黃而滑、煩渴溺赤、脈洪數、此湿熱也。頭痛惡寒、身重疼痛、汗出、胸滿不飢、舌苔黃或白、口渴不引飲、脈弦細而濡、面色淡黃、午後身熱、狀若陰虛、病難速已、此湿温也。遍身拘急而痛、不能轉側、近之則痛激、頭汗出、脈緩近遲、小便清白、此寒湿也。蓋夏末秋初、湿土主氣、余暑猶熾、新涼又加、其時暑湿寒三氣最為混雜、有感之而成湿熱者、有感之而成湿温者、有感之而成寒湿者。寒湿可以温解、湿熱可以清通、惟湿温不寒不熱、最為難治。其性粘膩、故病難速已。世醫不知為湿温、見其頭痛惡寒、身重疼痛也、以為傷寒而汗之、則湿感辛温發表之藥、蒸騰上逆、蒙蔽內外諸竅、有神昏耳聾、目瞑不欲言者矣：身其胸滿不飢、以為停滯而下之、則脾陽下陷、湿邪乘勢內潰、有洞泄不已者矣：見其午後身熱、以為陰虛、而用柔藥潤之、湿為膏滯陰邪、再加柔潤陰藥、遂有錮結不可解之勢矣。蓋湿温較諸温、勢雖緩而実重、上焦最少、病勢不甚頭張、惟中焦病最多。朱丹溪曰：六氣之内、湿熱為病、十居八九。朱南陽曰：湿温与中暑同、但身涼不渴為異。蔡宗玉曰：身冷自汗、四肢沈重、即係湿温。又曰：凡陰病脛冷、兩臂亦冷：湿温脛冷、臂不冷、非下厥上行、陽微寒厥也。…」

以上を整理すると

◇「湿熱」は、身熱・口渴激しく・尿は濃くなって量も減少し・発汗して・舌苔は黄で滑になる・脈は洪数である。湿熱はコッテリとなった古脂のように、停滯して籠った熱を清ます目的げ、便通（特に小便をだす）をつけてやる事が先ず行なわれる必要がある。

- ◇「湿温」は、頭痛し悪寒して・自汗があり・胸が痞塞しているようで腹が空かない・身体が重く疼痛も覚える・口渇のために飲み物を欲しがるということも無い・熱は午後になると出て陰虚の病状に似ている・舌苔は黄または白で・顔色は淡黄色になっている・脉は弦細で濡の状である。
- 『蔡宗玉』は、身体が冷たくて自汗があつて、四肢が沈重であるものは、「即係湿温」と言っている。「湿温」は、病勢は緩慢であるのに実は重い病で、なかなか治らないもので、治療も複雑である。
- ◇「寒湿」は、身体中が拘急（強わばって）して・寝返りも打てない程でその折には、近くに寄れば痛が増すかのようなのである・頭汗があつて・小便は水のように澄み通っている・脉は緩で遅脉に似ている・舌苔は白薄で滑である。寒湿は先に温めて寒を解除することが肝要である。

[暑湿]

「楊如侯曰：両脛逆冷、胸満、頭目痛、妄言多汗、此先傷于湿、又中于暑、湿得暑邪、遏抑陽氣而病也。頭痛、妄言、多汗、脉陽濡而弱、陰小而急、此先受暑、后受湿、暑挾湿邪、郁蒸為熱而病也。」

「雷少逸以湿温当以夏末秋初為界限、方与『内経』秋傷于湿之訓不相齟齬、亦与四時之氣、大暑至白露、湿土用事、若合符節。茲于上所列二証、病在夏月、故不以湿温名、而以暑湿称之。周禹載曰：湿病緩、暑病速。」

- (註) …暑湿に二つの証があり、一つは、先に湿に傷られ後に更に暑に犯されたもの、二つは、先に暑邪に傷られて後に湿を受けた病で、「暑挾湿邪」と言われるもの。この二つの証は症状に差異がある。

◎『伏暑』について

『温病正宗』中の「楊如侯」の「伏暑」に関連する記述は、「類傷寒」とも極めて関連が深いので研究の為に紹介する。

「冬月頭痛、微惡寒、面赤煩渴、舌白、脉濡而数、此冬月触動伏暑之邪而病者也。按雖在冬月、独太陰伏暑、不得誤作傷寒。蓋頭痛惡寒、内傷寒無異、而面赤煩渴、則非傷寒矣。然猶似傷寒陽明証、至脉濡而数、則断非傷寒矣。蓋寒脉緊、風脉緩、暑脉弱、濡則弱之象、弱則濡之体也。濡即離中虚、火之象也；緊即坎中満、水之象也。火之性熱、水之性寒、象各不同、性則各異。故曰：雖在冬月、定非傷寒、而為伏暑也。冬月猶為伏暑、秋日可知。伏暑之与傷寒、猶男女之別、一則外実中虚、一則外虚中実、安得混而同之。」

「伏暑有九似：頭疼壯熱似傷寒、往来寒熱似虐疾、翻胃吐食似膈氣、大便下血似腸風、小便不利似淋瀝、飲食無度似消渴、四肢困倦似虚勞、眼睛黄赤似酒疸、遍身黄腫似食黄。皆伏暑變象也。」と記述されている。

また、「雷少逸」の説も興味深いものがある「伏天所受之暑者、其邪盛、患于当時：其邪微、発于秋

后。時賢謂秋時晚發、即伏暑之病也。是時涼風颯々、侵襲肌膚、新邪欲入、伏氣欲出、以致寒熱如虐、或微寒、或微熱、不能如疟厘清。其脉必滯、其舌必膩、腕痞氣塞、渴悶煩冤、每到午後則甚、入暮更劇、熱至天明得汗、則諸恙稍緩、日日如是、必要二三候外、方得全解。…」と言う。

◎『陽暑』について

「伏気」が夏の暑に触発されるのであるが、「陰暑」は避暑と冷飲食の過剰・贅沢に由来するのに対して、「陽暑」は炎天下に長が歩きや運動や労働によって夏の暑さに犯される事に由来している点が異なっている。発汗・悪熱・口渴・眩暈・等、激しい場合には、嘔吐・意識の障害なども起こる症候である。所謂『熱射病・日射病』の状態である。治療は、先ず熱を冷ます・意識状態改善を図る・制汗できたら、津液を補ない内熱を鎮め・陰精を補養する。

★☆今年「辛未」年に当たり、「三の気」に相当している「夏と季夏」には客気が「太陰臨湿土」となっている年である。年の運気がこのような特徴で無くても「暑」病、「熱」病の病証を検討すれば、「陽明」「太陰」に重い意味がある症候であると言わねばならぬようである。

◎「夏」「季夏」の疾患の診療上の留意点

夏の外気は「暑」であり「熱」であるから「四季」の外気のなかでは最も「陽性」が強いのである。従って「体気」の最も「陽性」な所に親和性が高い、それで「衛気」を先ず傷ることになる。「衛表」は「皮毛腠理の分」であるから臟腑では「肺」を、経絡では「太陽」を損傷する。また「火気」であり「土気」であり「湿を挟んだ」熱であるとも表現される、「火臟」は「心」である、「心の液」は「汗」で「汗多きものは出血させず」「失血は発汗すべからず」と言う。

外感病の初期には咳嗽などの「肺」症候と「頭項痛」や「腰痛」「身拘急」などの「太陽経」症候とが現われるのは「衛分」が傷られるからである。「暑による病」は「伏気」が触発されたものである点が重要である。つまり「内発」と「外感」が併行しているので、二段階的に治療する他は無いのが、特徴である。

「七十難」に「…春夏者、陽氣在上、人氣亦在上…」と記述しているように、人の身体も夏になっているのである、これは現代の生理学でも実験的に確かめられている。つまり、ホメオスターシスの機構が作用していて、動脈血は冬には外気に体温を奪われないように深部を流れるものが多いが、夏には体熱が籠らないように浅表部により多く流れており、また発汗もしやすいのである。

「陽気」の盛んな季節には身体の陽気を養うように生活しなければならない、こう言うのが漢法医学の養生思想である事は良く知られている。